

芳賀の史跡めぐり

-9-

芳賀地区最北端の鶉山

金丸町の信号から北へ直線で約3.4キロメートル、赤城南麓の中腹に芳賀地区最北端の鶉山（うずらやま・標高620メートル）があります。芳賀地区は、この山から南方になだらかな裾野を引き、端気の段丘陵（標高110メートル）までいたっています。

赤城南麓は、昔、まぐさ場（牛馬の飼料や肥料となる草を刈り取る草地）

であり、明治九年までは所有者未定の原野でした。その後、明治二十二年に皇宮附属地、同二十三年に御料地となりました。

明治二十六年に、赤城南麓のまぐさ場をすべて借りて活用するため、赤城南麓に係る168の町村で赤城山興業組合を設立しました。借りた面積は6,600haで、東は新里村から西は赤城村までの広大な土地です。借りた土地には植林をする

こととし、植えた樹種は黒松が80パーセント、他はヒノキ・杉・クスギ・カラマツ・栗・ナラなどです。赤城南麓に黒松が多いのはそのためです。植林した木々は立派に育ち、豊かな森林となりました。地域住民は、薪を取ったり、落ち葉を堆肥にしたり、さつま苗の温床にも使いました。

昭和三十九年くらいまでは働き口もなく、収入も安定していませんでした。そのような中、森林の管理で刈り払った篠を商店主が買ってくれるようになり、店の前には、篠がたくさん積み上げられました。篠は、前橋駅から横浜に貨車で輸送され、色を塗り園芸用の支柱として船でアメリカへ輸出されました。その頃は、今のように石油製品の加工品が少なく、篠で作った、ざら・みけ・かご・土木用の

かるこ等がとても重宝されました。山と人は深い関わりを持ち、生活を豊かにしてくれる森林は大切に管理され、美しい里山の風景が保たれてきました。

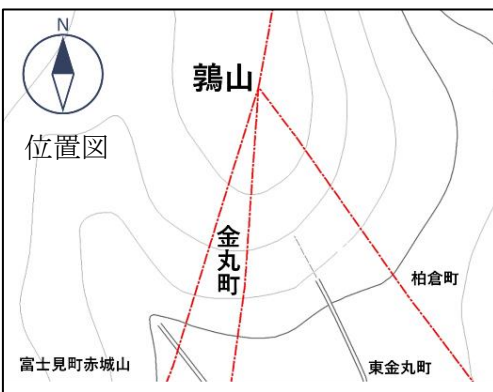
しかし、高度経済成長とともに働き方が変わり、人々は多種多様な産業に就くようになります。森林との付き合いは徐々に薄れ、荒廃が進みました。そこに追い打ちをかける様に、北米から輸入した材木と一緒にマツノザイセンチュウが入り、赤城南麓の松林は壊滅的な被害を受けました。その後、

県渋川林業事務所が代替樹木を植えて今日に至っています。今後、私たちは赤城南麓の森林を守るために、どう向き合えば良いのでしょうか？

生涯学習奨励員
宮内 悟

8月の主な行事予定

8月10日(土)前橋花火大会(利根川河畔・大渡橋南北河川緑地)
8月24日(土)・25日(日)生涯学習フェスティバル(前橋プラザ元氣21)



【写真】鶉山の山頂付近には平成二十六年十一月に自治会連合会と生涯学習奨励員が設置した標柱があります。



生涯学習奨励員視察研修

6月25日、芳賀地区生涯学習奨励員連絡協議会は、県内他地域の文化や歴史、先進地の事業等を視察する研修会を実施しました。

この研修会は、奨励員の資質向上と地域における充実した生涯学習活動の推進を図ることを目的とするとともに、地域での活動を円滑に進めるためには、自治会長との相互理解を深めることが重要と考え、芳賀地区自治会連合会と合同で行っているものです。

今回は、明治初期の教育機関として建築された旧吾妻第三小学校舎をリノベーションした博物館や八ッ場ダム工事現場を見学しました。

急ぎ足でしたが、県内の歴史の変革を一日で堪能し、懇親も深められ、有意義な研修でした。

芳賀地区

生涯学習奨励員連絡協議会

会長 中山 洋子